

環境について  
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

# Save The Kikuchi River



## 「ど」

んぐりころころどんぶりこ…ドジョウが出てきてこんにちば…童謡にもある様にドジョウはおとなしくて愛情のある可愛らしい魚です。昔から子供達の格好の遊び相手でした。昭和の中期頃までは子供達が近くの小川で遊びながら石ころを動かしたり藻の中をさぐったりすると、たいていは小さなドジョウやドンコが姿を現したものです。ドジョウは田舎では人間生活に一番身近な淡水魚で、子供の遊び相手だけではなく、家の近くで気軽に捕れていたのが、貴重な栄養源として広く消費されていきました。川や田んぼや灌漑用水溝など水と泥があれば何処にでも生息していました。最近では農薬の使用とU字溝の普及などのためかほとんどこ姿を見なくなりまして、食用に供するだけの量を捕獲する事はなかなか出来ません。しかし絶滅したのではなく、根気よく探せば農薬の少ない場所で見つけられることが出来ます。ドジョウにはシマドジョウなど何種類がありますが、ここでいうドジョウ（泥鰌）はドジョウ科ドジョウ属に属し日本にいるのはこの一種だけです。中国、朝鮮半島、台湾など広く分布し、寒冷地にはいないようです。口もとに10本のひげがあり、食欲旺盛で体長20セ

ンチ位まで成長します。池、沼、溝などの藻類や小動物などなんでも食べる雑食性で泥といつしよに有機物を取り込みます。体がぬるぬるしているので鱗がないように見えますが、小さい丸型の鱗が皮膚の中に隠れているので見えないのです。ウナギと同じように捕まえ難いので、以前はドジョウの居そうな溝上と下を閉め切って水を組み出し、泥に潜ったところを手で掘って掴み出したものです。6、7月に産卵し卵は水草などに附着し1年で成熟します。ドジョウにはカルシウム分が多く含まれているので有名です。ウナギの9倍あるといわれます。したがって骨粗鬆症の予防になります。その他ビタミンDやミネラルも多く、コレステロールや肥満の心配のない良質の蛋白質が多いといわれています。古来より「ウナギ1匹、ドジョウ1匹」という言葉がありますが、ドジョウ1匹の栄養価はウナギ1匹分の栄養価に匹敵するという事です。

ドジョウは時々水面に口を出して空気を吸います。腸で空気呼吸をするのです。台湾ドジョウは鰓の一部が変化した所で空気呼吸をするので構造が少し違います。肛門から出た気体の成分を調べたら酸素が11%、二酸化炭素が1%くらいだったそうです（普通の空気

の成分は酸素21%、二酸化炭素0.03%です）。以前は中に大豆を入れて「ドジョウてば（籠）」という漁具を溝に付けて捕ったものですが、「てば」を全部水に沈めてしまふと中に入ったドジョウはみんな死んでしまいます。タイワンドジョウと同じで空気呼吸が出来ない状態におかれると窒息するようです。こえとりじょうけをすけておいて足でドジョウを追い込み掬い上げるのが普通のドジョウの捕り方ですが、ドジョウ掬いと言えば島根の安来節が有名です。安来節に合わせ踊る「どじょうすくい」は何時見ても誰が踊ってもこんな面白い踊りはありません。



## 歴史調査の楽しみ方

# 日平城跡

## 熊本県立装飾古墳館館長 大田 幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)

# 標

高329・4mの城山の頂上(標高260・35m)谷

を挟み、直線距離にして390m離れた日平城跡の山頂とは、マイナス128mの高低差があります。調査時は、真夏でしたが、心地良い風が吹きまわした。樹木が無ければ、非常に見晴らしが良い所です。日平城跡の本体からは、北東方面の視野を完全に遮ります。したがって、是非とも、城山を城域に取り組む必要があります。今月号では、この城山の山頂から、もつと先の縄張りを説明します。

城山の山頂(I郭)は、長さ18m・幅15mの完全な平地です。さらに、西縁直下の斜面は、見事なまでに、削り落とされています。山頂部分は、造成にかなり力が入っている事が分かります。建物もありそうです。

山頂の北東隅から、痩せ馬地形の尾根が下がっています。高低差は9mありますが、24度の傾斜角度なので普通に登り下りが出てきます。

裾部は、幅5〜6m・長さ12mの

平地ですが、端部から登りに転じます。地形の変化点なので通常ですと、堀切が刻まれている箇所です。

これから先の尾根も、平地の状態を保ったままで、北東側が上がっていききます。幅75〜95m、長さ41mの規模があり、上位と下位では、2mの高低差があります。地域によっては、「馬攻め場」とも呼ばれる所です。

それから、やや傾斜の勾配が大きくなり、城山として二つ目の頂き(II郭)に上がります。裾部との高低差は32mで、このII郭も平地ですが、造成は完全で無く、南側部分へ少し傾斜しています。長さ14m・幅11mの規模があります。標高326・7mで、山頂(I郭)とは、マイナス27mの高低差となります。高さにおいて、ほとんど違いがありません。この地に立つと、城山の端にきた感じがしますが、縄張りは、まだ続きます。

尾根は、城山II郭から北側へ下がりますが、急斜面で、裾部との高低差は13.3mもあり、傾斜角度は35度となります。登り下りに大変な状況です。尾根は、裾部で舌状の地形に変化

します。そして、高さにして75m下った所に尾根の大きな括れ部があります。この尾根は、幅1mで窪んでいますので、堀切と見なされます。北側の対岸が岩場になっていて、特徴です。堀底と岩場は、85cmの高低差があります。

そして、岩場の裾部からは、城山の最後の縄張りとなる尾根が延びています。槍先の形をしており、完全な平地ではありませんが、明らかに造成されています。幅5〜7m、全長45m、細かく見ると、8段に分かれます。尾根はこれから自然地形のまま、次第に高さを減らしていきます。

〔小結〕我々を悩ました城山部分の測量調査は、後2回ほどで終わります。足場のない急傾斜の山腹の登りは、大変でした。今年の夏場の酷暑も追い打をかけたりましたが、最大の難点は、城山の登りに時間がかかった事です。和水中中央公民館から車で出発して、トラックでIV郭まで機材を運び、それから現場まで歩くと、一時間半が必要でした。ですから、この様な場

所の調査は、季節的に辛いですが、日の長い夏場に行わなければなりません。山中の日暮れは、平地より随分早いからです。

これからまた、日平城跡の本体部分の調査に戻ります。「後2回で、城山も終わりですね。もう登りたくないですね」。汗にまみれた益永浩仁さんの苦笑いが、城山調査の全てを物語っています。



城山尾根筋・北端部(最後の縄張り)